

## 大阪支部と陸上運動研究 まもなく支部結成50周年に寄せて

武藤 紳一郎

1971年大阪支部結成された。大阪に革新系の黒田さんが府知事に当選した年で、公害問題が全国に噴出していたときである。支部の陸上運動研究が集団研究（運動）で飛躍的に進展してきたことを、50周年を迎えるにあたり振り返ってみたい。

### 1. 74年「50m走の実践から」30時間

（機関誌「運動文化」第24号「私の実践ノート50m走の実践から」出原泰明実践80年11月）  
これを見ていると、短距離走を子ども自身の科学的探求を通して認識させようという実践の原型が生まれていることがよくわかる。

冬の大会荒木豊氏「意識焦点」の話（74年冬大会）を聞いた出原が、「スポーツとキネシオロジー」スポーツ科学講座8大修館を読んで、「運動の意識焦点」という言葉を発見。「うまくなる（できる）」ために、子ども自身の身体の外側に意識を集中させる（意識焦点を身体の外に出す）ことに気づく。

50m走を10mごとに区切って、スピード曲線を可視化する。スピードの落ち込み地点へ着目し、それを「謎の地点」と名付ける（76年～79年）。この走の乱れをリズムによる「引き込み作用」で回復させればよいと考えた。その方法は「意識焦点」を身体の外（腕）にあて、「ウデー！」と近くにいる観察者が声かけをすることで、走の乱れの立て直しを図るというものがあった。

また、出原はスピード曲線とストライドの変化を計測し分析する一方、50m直走路ついた足跡を緑のスズランテープを付けた釘で目印をつけ、これも可視化した。短距離指導「田植え」の誕生である（80年1学期）。走のレントゲン写真（短距離走の心電図）で、50mに約30個の緑リボンマークが並び、走者によって異なるラインが見事に観察できた。

この「意識焦点を外に出す」という手法は、他の教材でも子どもの指導に画期的な手法として取り入れられた。たとえば北河内ブロックの「蛍マーク」。マット運動で身体の部位を意識したり、観察させるために、その部位に黄色の円盤（直径5cmほどにゴムひもをつけたもの）をとりつける。また、まっすぐ走る（歩く）ために、目標物を目線の先におくなど。この田植えラインは全国を席卷し、今でも用いられる手法である。

### 2. マット・バスケットを経て、ハードルポドテキストへ

当時、「わかる」と「できる」こととの関係がどうなっているのか、大阪支部ではしつこく

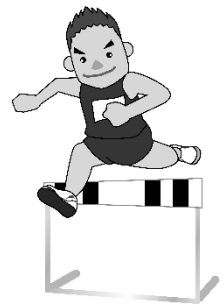
論議されていた。わかってこそできるにつながる。さらに、「わかる・できる」の追求にとどまらず、スポーツを運動文化としてとらえ、社会科学的分野も合わせて教えることが必要と論議は進展していった。「わかる・できるはもう古い。社会科学の認識を（冬大会陸上分科会出原）」と冬大会報告会で亀山が発言（81年1月）。この言葉を合言葉にハードルポドテキストが始まる。

（季刊「運動文化」27号 82年2月参照）

ハードル走や短距離走を科学（仮説実験的授業の手法で）しようと、バスケットポドテキストに引き続き、支部をあげての研究が始まる。

ハードルがうまくなるために必要なことはいくつもの視点があげられる。振り上げ脚をまっすぐ上げる（「足の裏！」がゴール側の観察者に見えるか）。踏み切り位置を遠くにして、近くに着地。ハードルぎりぎりの跳躍。跳ぶよりまたぐ。体重を前につけて（ディップ）、抜き足を水平に。かき込みで重心を落とさず、次の一步を大きく。4歩のリズム（一般には3歩のリズムと呼ぶ）リズム走で速くなる。などなど。これらを歴史と結びつけた。

支部研究はハードルの歴史と技術の変遷に着目。歴史研究と技術研究が直結することになった。牧場の柵から、トラックの柵へ。さらに可動式で、倒れるハードルへと変化する中で技術も変わっていく。セーリングフォーム(1865)、統一ルール(1878)、振り上げ脚を伸ばす(1887)…。



（第79回冬期研究大会提案集 1981年12月）

子どもたちは授業を通して、〇〇〇〇年代の私と〇〇〇〇年代の彼というように、「うまいへた」でなく技術を歴史的に「進んでいる・進んでいない」でとらえる。

- ・ぼくは、1898年の技術しかないから、今度の時間は1908年の技術までいきたい。
- ・ハードルの歴史を習ったが、自分は何年の時の最高の技術だったのかわかった。“その時代だったらなあ”と思った。
- ・あまり技術の“進んでいない人”をうまくさせるにはもっと真剣に、ペアー観察をし、自分でも努力させることだ。
- ・ハードルにはいろんな歴史があり、その歴史をぼくらは一步一步のぼり、現代まできた。さらに、その技術の歴史はこれで終わらず、もっといろいろな跳び方が考えられ、歴史に残るだろう。

これらの中学生の感想はこの実践の意図を十分に子どもたちが反映し、理解していることを示している。

### 3. GO マーク鬼ごっこの誕生

1980年秋のことで、難波高島屋前2階喫茶店で泉州ブロック会議をした。淡口さんが来る前の、船富さんと武藤二人の雑談のときである。船富さんが「(リレーで4年生は)思いっかし(全力で)走ったら、バトンを渡してくれへんと思ってるんや」と発言。

この発言を聞いて、当時、「できるわかる」の関係が頭から離れない私は、リレーでわからせることは「受け手が全力で走っても、渡し手は追いつきバトンを渡してくれる」それを小学生に体感させ、認識させることだと確信する。子どもたちは飛躍的に変わるだろう。ならば武藤自身の高校時代、リレーの練習で渡し手がまたたく間に受け手に追いつきそうなのを観察者が見て、「逃げろー!」と声かけしたことを思い出し、教材化することを思いついた。

翌年、第3回体育実践講座シリーズ「リレー」1981年6月でテキストに掲載し、提案した。この鬼ごっこリレーの誕生からのち、実践は榊原さんによりGOマークリレーへと深化。高校生でも有効で、「休み時間になっても止めよらへんのや!」と上田(生野工)さんが話していたことを思い出す。その後、榊原さんにより、アフォーダンス理論の典型事例として紹介され、教材価値が裏打ちされる。

(第3回体育実践講座テキスト「リレー」1981年6月 KICK OFF 第47号榊原論考)

紙面の都合で、走り高跳びや新聞幅跳び、ペースランニング、棒投げ、タイヤ投げなど画期的な実践を生み出してきたことを紹介できなかった。陸上運動研究に限らず、私たち大阪支部は集団研究運動に確信をもって取り組んできた歴史がある。

